

ずいそう

夢が渡る越佐海峡

池野正志



夏になると沈んでしまいそうに人口が増える佐渡島。そこは日本海に浮かぶ面積 854.76 平方キロメートル、人口 58,000 人の島である。そこに生まれ 18 年間住んだのち海を渡り本土に住むこととなった。今は、母親の介護のため月に 2～3 回この海峡を渡る。この海峡を渡るたびに時々思うことがある。40 年以上前を思い出し当時は、貧困な農家に育ち、父親は体が弱く、不器用なためいつも私が学校から帰ると、故障した農機具の修理と農家の手伝いであった。田んぼの一部が加茂湖の淵にあり、ここで農作業をしていると佐渡汽船の汽笛が鳴り時を知らせてくれる（写真—1）。この汽笛が、唯一の休憩や食事時間を知らせてくれる。「一服せんかっちゃ」と母親の声が掛かると、俺も親父も一服にはいる。海の方を眺めるものの会話は少なかった。好奇心が旺盛な私はいつも海を眺めながら「海の向こうには何があるのだろう」「どんな世界があるのだろう」と思う日々が続いていた。唯一の情報は、集落の先輩で、本土で学校に通っている方や働いている方が盆や正月で帰省した時に色々な話を聞かせてくれる。この事が楽しくてしょうがない。「俺も海の向こうへ行きたいな～」と想像しながらいつも夢を描いた。



写真—1 ジェットフォイルすいせい

当時佐渡島から海を渡るとき、佐渡汽船ではお別れのテープを引き「達者でな～」「また帰ってこいよ」「元気でな～」「手紙くれよ～」などと大きな声で相手を送り出した（写真—2）。涙をこらえながら、テープ



写真—2 カーフェリー

がなくなるまで岸壁で手を振る。同年代であればこんな光景を体験し、見て来た人は数多いと思う。この船は人を運ぶと共にその人の夢や希望も運んでいる。

季節により乗客も異なる。冬はほとんどの乗客は島内外で働く人や病院に通う人たちだけで人数は少ないが、春から秋にかけては島の四季折々の自然を楽しむ観光客により乗客は増える。地殻変動によりもたらされた美しい光景や国際保護鳥「とき」、海底での大魚「こぶたい」との出会い、そして北緯 38 度線が通過しているため 1,700 種近い南北両系の植物の自生、そして山野草の群生を見るため佐渡島へ渡る観光客は多い。胸を弾ませいろんな自然や歴史との出会いを楽しみに夢を膨らませている。

佐渡には野生のシカやクマがいないため山も安心して歩けると、他では見ることが出来ないシラネアオイの群生や、推定 300 年の杉が生き続ける神秘的杉林もあるという。船の中で聞こえてくる会話は、「珍すい花いっぱい見さ行くべ」「金山さ行ってみっが」「お土産すこだま買っていくべ」等とどこかの方言が飛び交っている。観光を終え佐渡から帰る観光客は、満足そうな顔して、土産をいっぱい抱えている。お土産袋には名前こそ書いてないが、我が家の嫁にとか孫にとか行先は決まっているのだろう。これもまた、袋の中には次なる夢の切符が入っていることだろう。2 月～3 月は受験シーズンなのか学生や父兄同伴の乗客が多い。将来を夢見て受験に向かうのであろう。その後、昔は「桜咲く」や「越佐海峡波高し」の電報が飛んできたものだ。結果はともかくこれもこの海峡を渡る。



写真—3 願いを込めるのぼり

常に越佐海峡は色んなものを渡らせる。今の船なら5m位の高波でも往来はできる。2m程度なら高速船まで走る(写真—1)。最近船も大型化し高性能になったため「波高し」の言葉は通用しなくなったと思う。

新潟県と佐渡市は平成18年度から共同で佐渡金銀山の世界文化遺産登録推進事業に取り組み、平成22年10月に我が国の世界遺産暫定一覧表への追加記載が了承された。その後世界文化遺産登録に向けて新潟県も佐渡市も取り組んでいるが、登録には至っていない(写真—3)。最近、また世界遺産の登録を審査するユネスコ(国連教育科学文化機構)は年1回の審査で扱う件数の上限を45件から25件に減らす検討に入ったとの事である。登録に向け関係者は努力を積み重ねているが、佐渡金銀山の世界遺産登録はなぜか遠くに感じられる。今まで、多くの人の夢が渡ってきた越佐海峡、今度の夢もどうか渡ってきてほしいと願う船の上である。

—いけの まさし (株)興和 代表取締役社長—